

いぶせんくスペシャル

Tuesday



柴又帝釈天の参道の草団子屋で意見を交換する慶応大の学生(左)と地域の人々

東京・日本橋横山町と日本橋馬喰町。昔から衣料問屋が軒を並べ

◇衣料問屋街で

地域の魅力は

観光名所発掘

街おこし

街おこしや、観光客の掘り起こしなどに学生が活躍している。カメラ付き携帯電話を使って、観光スポットを発掘するなど、学生ならではの若い感覚で地元の人たちに協力しており、産学連携の新たなスタイルにもなりそうだ。

産学連携で千客万来



マイルポストでは、名古屋学院大の学生が調理や接客のすべてを行う

学生に聞け!

るが、界隈には以前のような賑わいはない。もう一度、客の流れを呼び戻そうと、文化服装学院(東京都渋谷区)の学生が二〇〇三年

九月から、協力を続けている。

この試みは「トンヤdeサマリ」と名付けられ、問屋街の各店が貸し出した服や帽子などをスタイリスト科の学生が自由な発想でコーディネートする。店頭にとり置き置かれた商品が、組み合わせ次第で、一気にオシャレなグッズに変身してゆく。昨年十一月には、取引先などを招いてファッションショーも催し、学生たちの「力作」を紹介した。問屋街の機関紙作成などでも協

力し、延べ二千八百人以上の学生が参加している。

問屋街活性化委員会の小嶋晴三郎会長は「問屋も商品を右から左に流すのではなく、いかに提案するかが重要になる」と学生の感覚に魅力を感じている。学生にも「美地で学べるメリットは大きい」「宇野明美・同学院教務一課長)。スタイリスト科二年の円乗典子さんは「最初はちょっと古っぽいと思っていただけ、種類が豊富なのは驚いた」と問屋街の底力に感心する。こうした連携を通じて、現時点で学院からは来春、七人が問屋に就職することが決まった。

◇寅さんの街で

映画「男はつらいよ」で知られる東京・葛飾柴又。だが、映画は終了、観光客は減少している。この柴又を再活性化する取り組みに慶応大・加藤文徳助教授の研究室

の学生たちが協力している。

研究室はカメラ付き携帯電話を使ったコミュニケーションを専攻しているが、街おこしにも、この現代の利器が使われた。

街では「ポスト寅さん」時代の活性化について、「来る人がどう思っているかを知らない」と、街おこしはできない(斎藤勝治・葛飾区観光協会会長と悩んでいた。そこで、昨年十一月、研究室の学生二十一人に柴又の面白いと思ったスポットを自由に撮影、コメントをつけてもらった。

学生が撮った写真の多くは、帝釈天などの名所ではなく、のどかな路地裏や開けっ放しのドア、コインランドリーなど下町の生活感にじむ光景だった。斎藤会長たちは「自分たちの日常が、学生には非日常なんだと驚いた。学生には三月にも、参道の軒一軒の店に焦点を当てて、撮影し

「コンセプト」を定義し、自然のイ組みや人と自然のつながりなどを参加者に伝える。二泊三日の講習会に参加して講義や野外実習を受け、登録を申請すると、自然観察指導員として登録される。参加費は2~4万円。講習会は年間を通じて全国各地で随時開催している。



問屋街の商品をコーディネートして発表する文化服装学院の学生たち

心にある銀座通り商店街に、市内の名古屋学院大の学生が運営するカフェ&雑貨の店「マイルポスト(みちしるべ)」がある。空き店舗を活用した店内は約百平方メートル。学生が調理や接客すべてをこなす。年商は700万円という。

マイルポストのカフェ部門は、三、四年生の有志が、瀬戸みやけを扱う雑貨部門は、経済学部ゼミ生らの有志が担当している。このほか、休日には、学内のまちづくりのサークルが、ミッドFMなどのイベントを行う。

来客は一日三十一五十人だが、休日には一五倍に膨れあがる。店の賑わいは商店街全体にも影響を与えた。商店街の休日にも通行人は平均八百人(二〇〇一年)から、同千人(二〇〇三年)に増えた。二〇〇二年九月にマイルポストが開店して以降、商店街の空き店舗は十四から七に減った。学生の店が、閑散とした街を変えていった。商店街女性部の丹羽視穂子さんは「商店街の中には同じ発想しかない。学生にやってみようしかないと思った」と振り返る。

マイルポストは愛知県の一商店街共創事業「商店街インテリゲンシツ事業」の第一号として、大学の指導の下、開店した。カフェ部門の二代目の店長・森本真季さんは「スタッフを手とめるのは大変ですが、地域の人たちとの話は楽しい」と話す。大学側も「学生に役割を明確にして責任を持たせる(経済学部の水野晶夫助教授)ことで、取り組みを継続させてゆく考えだ。

こだわり ワーク 事情

◇瀬戸焼の街で

焼き物の街・愛知県瀬戸市の中